

1) David Steinberg ed. 1957. Cambodia: Its people, its society, its culture. New Haven: HRAF Press.

- ・人口に比して土地が広い、農地に余剰がある。そのため、農業技術の改善に人々は関心が無い。仏教の影響か、家族で経営できる以上の規模の農地を得ることに関心が無い。
- ・フランス統治時代も、ゴムプランテーション以外に技術的な革新はなかった
- ・三種類の稲がある。雨期稲、浮き稲、乾期稲。国内の水田の80パーセントは雨期稲
- ・1953～54年には、150万トンの粳米を生産し、5分の1を輸出した。しかし翌年の1954～55年には、初期の降水不足、移植後の増水、末期の干ばつによって、緊急の輸入にまわった
- ・家族を単位として、10エーカー（※約4ヘクタール）以下の規模を経営。エーカーあたりの平均生産量は0.5トン（※ヘクタール計算で約1.2トン）であり、50年前と変わらない。アジアの中で最低レベル

2) David Steinberg ed. 1959. Cambodia: its people, its society, its culture. New Haven: HRAF Press.

- ・1958年の半ばまでに、政府は、農業関係の2カ年計画のために、14,300万里エールを費やした。うち8700万里エールは農業用水の建設にあてられた。
- ・農地が豊富にあり、自然は豊かである。そのためか、カンボジア人は、中国人・フランス人・ベトナム人の経済的支配の拡大を意に介さない
- ・土地への人口圧が低いため、カンボジアの農民は他人のために働こうとはしない。国土面積のうち、毎年耕作されるのは10%だけ。
- ・稲作技術としては、5～6月に苗床の準備をして、移植することが一般的。バタンバン州にだけ直播がある。耕起には水牛を使う。犁は木製。20～30センチの深さで耕起する。田植え前の増水は困難を生む。田畦や排水路の建設は不十分。移植したら、それから半年は放置される。11月後半から1月初旬までが収穫
- ・カンボジアの農民は、変化に受動的である。長期的な開発プロジェクトは困難に直面している。それでも、1953年には15トン、1954年には1900トンの改良品種の種粳が無料で配られ、より良い耕作方法が指導された。機械化はバタンバン州のみである
- ・1952年には、灌漑水路の建設に関するアメリカの援助があった

3) Donald Whitaker. 1973. Area Handbook for the Khmer Republic (Cambodia). Washington: US Government Printing Office.

- ・1972年までに、耕作地は3分の2に縮小。戦争と、共産主義勢力が国土の一部を占領したため
- ・共和制政府は、農業開発に明確な意思を持っている。農業機械化、水力発電と灌漑水路の拡張、特定品種のプロモーション、土地改革を表明している。しかし、そのどれもが細かく議論されていない。唯一の例外は、プレークトナオト川の開発計画
- ・米の新しい品種の導入は進まず。数多くの伝統品種が存在。それらは収量が低だけでなく、粒径や水分含有量がばらばらで、精米の輸出の障害となっている

- ・環境に対応した人間の長期の営みがもたらしたひとつの品種が、浮き稲である。戦争が始まって、浮き稲の栽培面積が増えた
- ・灌漑の導入も、化学肥料の使用も、改良品種の使用もないため、収量は低い。エーカーあたり0.5トン（※ヘクタールあたり1.2トン）。バタンバンとコンポンチャームだけ例外

4)Nesbitt. H. J. ed. 1997. Rice Production in Cambodia. Cambodia-IRRI-Australian Project.

○20世紀初頭まで

- ・カンボジアに伝統的な稲作の形には、深水稻、陸稲、減水期稲、雨期稲がある。農民は、それぞれの場所で、水の深さに従った品種選択を行う。さらに、早稲、中稲、晩稲の違いも知っており、家計状況や水田の性格に従って組み合わせている
- ・仏領期は、Saigon-Cholonにコメ経済の中心があった。カンボジアは原材料の提供のみの役割だった。当時の国内の稲作には、2つのタイプがみられた。ひとつは、バタンバンでの大土地所有型の開発下での稲作であり、計16,000ヘクタールのコンセッションを形成していた。そのなかには、農業試験場もつくられていた。他方は、伝統的な小農による稲作である。フランスは、小農らからも、徴税のかたちで米を取り立てようとした
- ・小農の稲作は、技術的な開発政策の対象になってこなかった。伝統的なままで、収量は長らくヘクタール当たり1トンのレベルだった
- ・1900年代から1950年代まで、フランスは、カンボジアから毎年5万～20万トンのRough riceを輸出した。1940年には、カンボジアは世界で3番目の米輸出国だった

○独立～内戦前

- ・1955～1963年は、西側の援助が多かった。政府は、フランスから、バタンバンの大土地所有米プランテーションを引き継ぎ、直接管理した。USAIDが灌漑プロジェクトを、シエムリアップ・コンポンチャーム・カンダール・カンポートで実施した
- ・1955年に、国内の6カ所に、Rice Research Stationsがつくられた。収量の試験と品種の選抜のための作業をそこで行った。1960年まで活動した
- ・1962年までに、伝統品種からBredした改良品種が、栽培の20%を占めるようになった
- ・1956年には、農業組合の役割を担い、適切な額の農村金融もおこなう官製組織として、the Office of Royal Cooperationが設立された
- ・1963年までに、一般的な雨期稲の収量は200キロ上昇して、ヘクタール当たり1.1トンになった。輸出も増えたが、粗悪な精米技術が障壁となっていた
- ・1963年に、カンボジアはアメリカからの援助を拒否した
- ・1964年に、国内経済が国有化され、貿易だけでなく、米生産も、政府組織SONEXIM (Société Nationale d'Exportation et d'Importation) の管理下に置かれるようになった。既存のORCが米を買い付け、SONEXIMにそれを売るという体制がつくられた。同時に、SONEXIMが肥料や農薬をORCに使って流通させた
- ・政府の米の買い付けが組織化されると同時に、ベトナムへの密輸が増えた。ブラックマーケットの米の値段は政府買い上げの3倍だった。政府の締め付けが厳しくなると、1967～68年には農民蜂起が生じた

- ・1969年まで、灌漑による乾期稲の生産は全体の5%のみだった。化学肥料の普及は少なかった。米の増産は、耕作面積の拡大によるものだった。海外（フランスと日本）との技術協力はまだ日が浅く、開発の成果は上がっていなかった。機械化はバタンバンのみ

○ポル・ポト時代

- ・ポル・ポト時代には、全国でヘクタールあたり3トンの米生産が目指された。そのため、水田が1ヘクタール四方の正方形に造成しなおされた。そこでは、1キロメートルのグリッドで水路が掘られ、灌漑用水を供給する計画だった
- ・田畦の樹木は伐採された。労働力の組織化が全体主義的な形で断行された。ただし、農機具は伝統的なものだった
- ・灌漑水路の7～8割は使用不可能（設計ミス）だった。バタンバンでは、中国人専門家による高収量品種の開発が行われた。そこでは、ヘクタールあたり6トン達成する高収量品種を栽培したという政府報告もあったが、全国的には確認されていない（※ほか、この時代には、浮き稲は禁止??）
- ・農業開発・指導をできる人材が多く殺された（※次の時代の困難）

○1980～90年代

- ・1980年代のカンプチア人民共和国では、米生産が国家政策の中心とされた。農業機械と役畜の不足のなか、ベトナム人専門家の意見を取り入れて、集産化が実施された。しかし、農村ではブラックマーケット（自由市場）も存在した
- ・20～25家族からなるクロムサマキの設立がみられた。労働点数による収穫の分配がおこなわれた。しかし、クロムサマキは、徹底されていた訳ではなかった（※実際は早々に解散→家族経営に戻る）
- ・1980年代には、数千人のカンボジアの学生が東側陣営の国々に留学した。IR36やIR42といった改良品種が、それらのチャンネルから導入された。農業機械、農薬、肥料も一部導入された。農業技術の普及のために、1987年に、Cambodia-IRRI-Australia Projectが始まった
- ・1989年に、国が社会主義路線を放棄し、カンボジア国へ改称すると、公式にクロムサマキの解散（＝農地分配）が承認（追認）された
- ・1990年代前半のカンボジアでは、農業がGDPの45～50%を占めていた（うち、米は17%）。1993年の全耕地の88%が稲栽培だった。米生産の90%が雨期稲によるものだった
- ・収量は、ヘクタール当たり1.3トン
- ・条件の良い土地は米以外の作物が栽培されており、水田の一部は落花生やジュートに転じられ・・・。「稲作は安い、金にならないものとしされ、市場経済に取り残されている」
- ・（※その後は、「金になる稲作」が登場!?)